

学会便り

令和元年度第2回参与会報告 Second meeting of Advisory Committee report

穴見 敏也
Toshiya ANAMI

令和元年11月27日に本年度第2回の参与会を開催した。参与会は経済産業省製造産業局および軽金属のユーザー企業からなる参与メンバーに参加頂き、ニーズの把握や学会側からの情報発信を目的としているが、今回は、輸送業界における軽金属のユーザーである日本フルハーフ株式会社の協力を得て、同社の本社工場見学ならびにトラックボディ業界の現状と将来動向についての講演を企画した。また、参与および委員から軽金属学会に対する意見を伺った。

同社は1963年に設立、米国フルハーフ社の技術を導入し、トラックの荷台で使われるアルミニウム合金製ボディを国内で初めて量産化して以後、物流合理化の旗手として、陸、海、空の幅広いシーンに多彩な輸送機器を提供している。今回訪問した本社工場は、全国5か所にある生産拠点の基幹工場であり、日ごろ街中でよく見かけるトラックのボディであるウイングルーフやドライバン、温度管理車などを製造している。

当日は、会社紹介に引き続き、ウイングルーフボディを製造する第一ライン、ドライバンを製造する第二ライン、温度管理車を製造するラインに加え、電着塗装工場や仕上げ、出荷場など、製造工程の全般について見学した。ウイングルーフボディの製造ラインでは、ウイングルーフ車のボディが大きなものでは長さが12mにもおよぶことや、標準タイプの製造だけでなく、顧客の要望に応じた特別仕様が多く作られているとの説明があり、場内でも多種多様なボディが同じラインで作られていた。また、ボディで使われている素材は、アルミニウムだけでなく、鋼や木材が適材適所で使われており、トラックボディにおいてもマルチマテリアル化が進んでいることを実感した。さらに、ドライバンの製造工程ではコルゲート加工したアルミニウム板をリベットで接合していることや、温度管理車の製造では断熱材としてのスチレンフォームをアルミニウム板と接着していることなど、接合においても求められる機能に応じた使い分けがなされていることを見学できた。

工場見学に引き続き、同社の杉崎様から「架装業界の現状と将来」と題してご講演をいただいた。雇用環境の変化や情報技術の進化、経済のグローバル化がキーワードとしてあげられ、近年は“ホワイト物流”についてもさまざまな動きがあり、同社としても積極的に取り組みを図っているとの紹介があった。

工場見学会、講演会に引き続き、同所で参与会を開催した。軽金属学会の2019年度活動状況や会員数の動向などを紹介し、参与および委員から意見を伺った。自動車技術会での取り組み例として、材料関係の委員会が講演大会などでユーザー企業の適用事例と結び付けた講演企画を行い多くの集客を得ていることや、企業の研究部門では学会への発表・投稿を数値化して積極的に勧めていることなどの紹介があった。

今回、工場見学、講演会および参与会会合と盛りだくさんではあったが、質疑、議論が非常に活発に行われ、参加者にとっても貴重な情報交換の場が提供できたものと思われる。今後も参与メンバーの要望、関心事を伺い、当学会としても参与会を有意義な情報交換、情報発信の場としていきたい。



図1 日本フルハーフ株式会社 高橋工場長挨拶



図2 日本フルハーフ株式会社 杉崎様講演